**饅頭怖い**

**（あらすじ）**暇をもてあました町の男たちが集まり、それぞれ嫌いなもの、怖いものを言いあっていく。「[クモ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%A2)」「[ヘビ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%98%E3%83%93)」「[アリ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AA)」 などと言い合う中にひとり、「世の中に怖いものなどあるものか、クモでもへびでもアリでも四足なら何でも食べる」とうそぶく男がいる。他の男が「本当に怖いものはないのか」と聞くと、うそぶいていた男はしぶしぶ「本当はある」と白状する。「では、何が怖いのか」と念を押 され、男は小声で「[まんじゅう](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A5%85%E9%A0%AD)」とつぶやく。男はその後、「まんじゅうの話をしているだけで気分が悪くなった」と言い出したので、周りの者たちは隣の部屋に布団を敷いて男を寝せる。

残った男たちは「あいつは生意気な奴だ。まんじゅう攻めにしてこらしめてやろう」と、皆でまんじゅうをたくさん買いこんで男の寝ている枕元へすらりと並べる。目覚めた男は声を上げ、ひどく狼狽してみせながらも、「こんな怖いものは食べてしまって、なくした方がいい」と「あ-あ、饅頭怖い！饅頭怖い！」言ってまんじゅうを全部食べてしまう。一部始終をのぞいて見ていた男たちは、男にだまされていたことに気付く。怒った男たちが男をなじり、「お前が 本当に怖いものは何だ!」と聞くと、「△△△△△△」という落ちがついて終る。

**そば清**

**（あらすじ）**　主人公の名は清兵衛、盛りそばの大食いで有名なことから、通称『そばっ食いの清兵衛』略して『そば清』と言われている。[そば](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%95%8E%E9%BA%A6)屋の客連中が、盛りそばを10枚食べたら1両払う、という賭けを持ちかける。清兵衛は難なく10枚をたいらげ、賭け金を獲得する。悔しくなった客連中は、翌日再び15枚で２両の賭けを持ちかけるが、清兵衛はまたしても完食に成功し、賭け金を懐にし店を出て いく。さらに翌日には20枚で3両の賭けをするが、まんまと清兵衛にやられてしまう。

町のもの知りがそばやの客連中に「あれは『そば清』と言って江戸ではそばの大食いでは有名な男だ。いつも35、6枚は食うんだ」と話をする。

悔しさがおさまらない客連中は、それではと40枚の大食いを清兵衛に持ちかける。清兵衛は自信が揺らぎ、「また日を改めて」と店を飛び出して、そのままそばの本場・[信州](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E6%BF%83%E5%9B%BD)へ出かけてしまう。

信州でのそばの大食い大会で勝った清兵衛は、江戸への帰り、信州の山道で迷ってしまう。途方にくれ、木陰で休んでいると、木の上にウワバミがいるのを見つけ、声が出せないほど戦慄する。ところがウワバミは清兵衛に気づいておらず、清兵衛がウワバミの視線の先を追うと、銃を構える猟師がいるのが見える。ウワバミは一瞬の隙をついてその猟師の体 を取り巻き、丸呑みにしてしまう。腹がふくれたウワバミは苦しむが、かたわらに生えていた赤い草をなめると腹が元通りにしぼみ、清兵衛 に気づかぬまま薮のむこうへ消える。清兵衛は「あの草は腹薬（＝消化薬）になるんだ。これを使えばそばがいくらでも食べられる。いくらでも稼げる」とほくそ笑み、草を摘んで江戸へ持ち帰る。

清兵衛は例のそば屋をたずね、10両の賭けに乗るうえ、約束より多い60枚のそばを食べることを宣言する。大勢の野次馬が見守る中、そば が運び込まれ、大食いが開始される。清兵衛は50枚まで順調に箸を進めたが、そこから息が苦しくなり、休憩を申し出て、皆を廊下に出させ、障子を締め切らせる。清兵衛はその隙に、信州で摘んだ草をふところから出し、なめ始める。

しばらくして観客や店の者は、障子のむこうが静かになったので不審に思う。

一同が障子を開けると、清兵衛の姿はなく、そばが羽織を着て座っていた。例の草は、食べ物の消化を助ける草ではなく、人間を溶かす草だったのである。